Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　危険な水系　¥350

昭和46年2月20日　初版発行

著者　斎藤栄（さいとう さかえ）
神奈川県横浜市中区港町1-1
横浜市役所内

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替 東京115347
株式会社 光文社　電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（明泉堂製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Sakae Saitō 1971

(分)0-2-93(製)02189(出)2271(0)

長編推理小説・書下ろし

危険な水系

斎藤 栄

カッパ・ノベルス

目次

序章 5
第一章 盗聴器 7
第二章 攻防戦 28
第三章 密室殺人 50
第四章 万葉集の謎 72
第五章 陸上自衛隊第一教育団 95
第六章 アリバイ 116
第七章 デッドロック 138
第八章 琵琶湖の論理 159
第九章 多賀大社 181
第十章 爪 204
終章 227

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

本文イラスト　金森（かなもり）　達（とおる）

序章

目の前に青々としたフェアウエーが広がっている。東光石油の専務取締役有泉敬三は、白い鍔広のゴルフ帽の下で、ジッと前方を睨んだ。

ゴルフ焼けした首筋のあたりが、毛穴を浮き出させるほど黒光りしていた。このINカントリークラブでは代表的なロングホールへの挑戦である。

有泉は五十五歳。石油業界屈指のやり手だが、特に天然ガスの開発では右に出る者がいなかった。そしてゴルフの腕前も、業界ナンバーワンを誇っていた。

風をきって振りおろされた有泉のドライバーには、確かな手ごたえがあった。ボールは曇った初秋の空に美しい弧を描いた。

「さすが……オーナーの貫禄十分ですな」

ティーに近づいた池田司郎がお世辞を言った。池田は大和鋼業の重役である。有泉とは同年輩。ここ一年ばかりの間に、ゴルフ仲間になった男だ。

「ここいらで遅れをとりかえさんことにはね」

有泉はゴルフ帽の下で白い歯を見せた。この業界には珍しい紳士タイプ。滅多に喜怒哀楽を表情に現わさないことで有名だった。が、今日はどうした風の吹きまわしか、ひどくご機嫌がいい。

「このぶんだと、来月の大会でも、有泉さんにカップをもってゆかれそうだな」

池田はティーグラウンドで、二、三度、ドライバーを素振りした。ひと月後に迫った業界のプライベート・ゴルフ大会の話である。昨年も有泉が優勝し、池田は三位にとどまった。

「うまいこと言って、こっちの調子が狂うのを狙っとるぞ」

有泉が笑いながら、クラブをキャデーにあずけた。二人のハウス・キャデー以外に、周囲には誰の目もない。

唸りを生じた池田のスイングとともに、適度にティーアップされた白球は、ぐんと伸びてフェアウエーのかなたへ……。

「こいつはしまった。いつもの悪い癖が出たらしい。右へきれすぎた」

池田の言うように、ボールは右側のラフにころがりこ

んだもようである。
「ワンストローク助かったかな」
有泉専務は先に立って歩き始めた。池田は首をかしげながら、その後を追った。一見、二人ともなんの屈託もなさそうだった。ことに、池田は昨今、新聞紙上を賑わしている公害問題の元凶とは思えないほど、ゴルファー姿が身についていた。
大和鋼業による亜硫酸ガスの大気汚染は、二年ごし、地元住民の突きあげを食っている。京浜工業地帯の住民たちは結束して、「青空同盟」をつくり、大々的に大和鋼業の工場増設に反対し始めた。なんとか排煙問題を片付けないと、長年、京浜工業地帯に築きあげた地盤を失う虞れがあった。
「有泉さん……」
池田は呼びかけた。
くるっと振り向いた東光石油の専務の目は鋭く輝き、池田の呼びかけを予期していたように見えた。
「なんです?」
「くどいようですが先程の件、とにかく担当者同士で話合いを始めさせてください。うちのほうでは増山という男を出します。信用のできる人間ですよ」
「わかっています」
有泉のほうは簡単に答えたが、言葉を腹の中で咀嚼するふうだった。
「まったく、おたくのやり方を真似しないことには、これからの企業経営はできなくなりそうですよ。公害を逆手にとって、公害を出す自己の技術知識を、公害防止のノウ・ハウに変えてしまうんだから、そこまで研究が進んでいるとは、ついさっきまで信用しなかった……」
でっぷり肥えた池田は、自分に比して精悍な感じのする有泉を、なかば尊敬のまなざしで見た。
キャデーがラフに飛びこんで、池田のボールを捜しあてた。枝ぶりのいい松林の中に二メートルほど、ころがりこんでいる。
「こいつはしまった。少なくともツーストロークは損をしそうだ」
池田はぼやき、足元の乾いた砂地を靴の先で軽く蹴った。それから、キャデーに命じて、アイアンの四番を受け取った。
ぼやきとは裏腹に、キャリアを誇る池田のセカンド・ショットは、ただの一発でボールをフェアウエーに叩き出した。

「うまい」
と、有泉は言葉少なに褒め、池田の話しかけた内容なぞ、念頭にないように自分のボールに歩みよった。
雲がきれて、まだ夏を思わせる強い陽射しが、有泉の白いオープンシャツに照り映えた。有泉はゆっくりとバックスイングを始めた。

第一章　盗聴器

1

会場にあてられた横浜福祉会磯子ビルの大会議場は、議事の始まるまえから、熱っぽい空気に包まれていた。正面の壁には、ケント紙のような丈夫な紙をつなぎ合わせ、マジックインキで一息に書いたものが貼ってある。
〝東光石油の天然ガス採取計画反対・住民総決起大会〟
コの字型にしつらえた代表者席には、各町内会・自治会の選ばれた者がすわり、その手前の折畳み椅子には、傍聴しようとする住民がいっぱいで、全部はすわりきれないでいた。
中央には、この総決起大会の議長になった明正大学の工学部教授、村岡要太郎が、面長の端正な表情を少し赤らめて、開会のチャンスを待っている。村岡教授は五十五歳。古くから横浜市磯子区の住民だったし、都市工学

の先駆者でもあるから、今日の議長にはもってこいの人物だった。

鶴見区から応援に駆けつけた「青空同盟」の代表者二名が着席するのをしおに、村岡教授は開会を宣言した。

「……すでにみなさんはご承知のことでしょうが、簡単に東光石油の動きを要約しておきましょう」

二、三の事務的な発言の後、村岡はたんたんとした口調でつづけた。

「ご案内のように、東光石油はかなり以前から、天然ガスの開発に力をそそいでおりました。天然ガスはカロリーが高い上に、簡単に商品化できる利点があるので、大企業としては非常にうまみのある産物です。天然ガスの一番大きな産地は新潟ですが、次は千葉県、そしてこの多摩丘陵の南端にある横浜市にも、相当の圧密をうけた深部層の構造性ガスのあることがわかっております。東光石油はこの巨大な利権に目をつけて、問題の場所が私たちの住む都市の真下であることに頓着なく、天然ガスの採取を強行しようとしているのですが……」

二百人近い場内の参加者の間に、ざわめきが期せずして起きた。

「これはとても危険な作業です。おそらく地盤沈下はまぬがれないでしょうし、坑井の周囲の町内は、相当の公害を覚悟しなければならない。この点だけでも、反対する理由になります。ところが、東光石油は、地盤沈下等に対しては心配ないような方法を講じると言っている。というのは、最近、東光石油は新たに事業部制をしいて、公害防止事業部を発足させた。この部が、多年の研究による技術を使って、地盤沈下の防止策を各社に売り込んでいるのであります。つまり、みずから地盤沈下を起こす原因となった地下ガスの採取を逆用して、公害の原因となる亜硫酸ガスなどを逆に地下へ封じこめようとする技術です。東光石油では、技術的に完全だと称していますが、私どもの大学ではまだ実験の域を出ないと見ています。それを東光石油は、私たちの町の地下で行なおうとしているのです。私たちはモルモットじゃない。また、公害防止企業という仮面をつけた新しい公害企業の出現に、敏感にならなくてはいけません」

村岡要太郎の弁舌はさわやかになった。ちょっと都知事のスマイルに似た微笑を、時折り片頬に浮かべて諄諄と説く姿には、犯しがたい威厳さえあった。

「しかも……東光石油とタイアップするのは、どうやら大和鋼業らしいという有力な情報が流れています。大和

鋼業といえば、ここに来ておられる『青空同盟』のかたがたが、非常に苦労されたように、京浜地区における札つきの公害産業なのです。つまり、東光石油と大和鋼業が手を結ぶことは、私たちの街の地下に、大和鋼業の煤煙が吹き込んでくることになります」

「絶対に反対！」

ワイシャツ姿の青年が、傍聴席から野次をとばした。

ここに集まった住民は、森町、中原町、杉田町、洋光台団地など、磯子区民のほかに、港南区笹下町の一部も参加していた。面積にして約八十ヘクタール。いかに地下一キロ乃至二キロのガスを掘るにしても、住民に影響しないわけはない。

「エエ……お静かに……」

手で制した村岡は、テーブルの上のマイクを左手でひきよせた。

「とにかく、東光石油は今後、あらゆる手段を使って試掘を強行すると思います。すでに出願は昭和四十二年になされているのです。住民運動が強力になって反対の火の手があがれば、切り崩しの手段も露骨になるにきまっています。しかし、私たちはトコトンまで、これに反対しなければいけません。中途半端な妥協は、私たちの美しい街を公害でよごすだけですから……。さいわい、私は東光石油が主張する公害防止の新しいノウ・ハウ……知識を調査研究する用意がありますので、その結果を次回に、ご報告する予定です」

これまでにわかっているのは、東光石油の狙う鉱床が、地下千八百メートルの池子層、逗子層にあること、そこへ、有毒なガスを圧送するのは、非常にむずかしい作業だという事実だけだった。

村岡教授は、東光石油の有泉専務とは旧知の間柄である。数年まえには、会社の顧問役をつとめたくらいで、いわば東光石油の身内みたいなものだった。ところが、今度の開発では敵味方にわかれてしまった。村岡は、東光石油の公害防止方法に疑念を抱いて、市街地内の天然ガス開発に反対したからだ。

東光石油にとって都合の悪いことには、つい最近、村岡が、問題の地域内である、洋光台地区に引っ越し、そこの住人となったことだった。

教授を排除するわけにはゆかない。しかも村岡は、公害問題の専門家である明正大助教授上原の師である。この会合にも、上原助教授が姿を見せていた。

型どおりの発言に加え、アララギ派の歌人でもある村

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

岡教授の巧みな誘導で、会場は活気ある討論の場になっていった。

2

総決起大会が開会されてから小一時間過ぎたとき、この反対運動の行く手を象徴するような事件が起きた。

磯子ビルに頼んでおいたお茶のサービスが始まった。三人の若いミニの女性が、盆に湯呑茶碗をのせ、上座のほうから配りだした。

村岡教授の前にも、無造作に湯呑が置かれた。その女の子はよほど無神経だと見え、教授が議事進行用に用意したメモの上に、ドカンと置いてしまったのだ。

「ああ……」

村岡教授が顔をしかめ、慌てて湯呑を持ちあげた。ところが、縁いっぱいに注いだお茶は、舌がやけるほどの熱さ……。

「あ」

二度目に叫んだ教授は、急いで湯呑を置こうとしたが、指先が狂ったのだろう、アッと言う間もなく、茶がこぼれ、テーブルの上を走った。

「おい。雑巾、雑巾……」

教授の隣りにいた男が大声をあげた。ミニの女性は盆をテーブルの端に置き、会議場を飛び出していった。

その間に、湯気を立てたお茶は、ポタポタと床に滴った。

真っ赤な顔をした若い女が、雑巾二枚を手にして走りこんで来た。すっかりあがっているらしく、ちょっと乱暴な手つきでテーブルを拭く。そして床を……。

「ちょっと……」

去りかけた女の手から、村岡教授は雑巾を受け取った。床に滴ったお茶の一部は、テーブルの裏側に回り、ちょうど彼の膝を濡らす格好になっている。

テーブルの下に手を入れた村岡は、軽く拭きかけ、ふと手をやすめた。

わずかな異和感を掌に感じたのだ。テーブルの裏にかがみこんだ村岡は、一瞬、全身に電流が走ったような衝撃を受けた。右手を差しのべ、ゴムの強い吸着盤ではりついている金属製のものを取りはずした。

六角形の昆虫に似た器械。触覚のような部分もある。

「盗聴器だ！」

思わず村岡は叫んだ。

型は珍しいが、彼はこの器械が最新式の盗聴器なのを見抜いた。

今日の決起大会は住民だけの集会になっている。関係会社の者はむろん、新聞記者などの傍聴も許してはいなかった。

盗聴器と聞いて、会場は騒然となった。代表者たちは腰を浮かせた。

「盗聴器の発信装置がここにある以上、誰かがこの部屋の近くでようすを聞いていたんですよ」

教授は説明しながら、いったん議事を中断した。とにかく盗聴者を発見するのが先決だった。

この磯子ビルは四階建てで、大会議場は一階と二階をぶち抜いてできている。三、四階部分は貸事務室。一、二階の小部屋が、売店と磯子ビルの管理事務所である。

参会者たちはいっせいに各部屋へなだれこんだ。トイレットの中を覗く者も出た。村岡だけは冷静さを失わなかった。

「まず、ビルの出入口をふさいでください」

陣頭指揮に立ち、きびきびと命令する。手配は遅れていないのに、相手が素早いのか、この大騒動も三十分ほどで落着した。どこにも怪しい人影は見つからない。ただ、想像されるのは、大会議場に付属する男子用トイレの中に、何者かが潜んでいたのではないかという点だけだった。

決起大会は再開された。

村岡教授は議長席に着き、おもむろに口を開いた。

「みなさん、これで相手の態度、やり口が、よくおわかりになったと思います。一口に言えば、手段を選ばないつもりでしょう。相当の決意と用心をしなければ、私たちは分裂させられることになりますよ」

「これから、どんな作戦でやったらいいのか、みんなで知恵を出し合ったらいかがです?」

頭を職人刈りにした町会代表が叫んだ。

「けっこうです。考えましょう」

教授はその提案を受け入れながら、こんなふうに話をつづけた。

「それには、もっと具体的に、相手がどんな会社で、どんな人間がいるか、それを知るのが一番です。前回、この大会の発起人会でも話が出ましたが、東光石油の有泉という専務はなかなかの人物ですよ。もっともこの人は表面に出ないでしょう。窓口は業務課長の岩井という男です」

「真面目そうな課長に見えるがな……」
杉田町の町内会長が呟くように言った。
「猫っかぶりさ」
野次が飛び、会場に失笑が湧いた。
「岩井課長は確かにそうした一面を持っていますね。私も個人的に話し合ったことがありますから、大体の見当はつきます」
と、村岡教授は議長席で喋った。
「ひとつ言えることは、会社に対して非常に忠実な人間なのです。年輩も私くらいで、今の世の中では古いタイプかもしれません。しかし私が恐れるのは、あのひとのどこかに偏執狂なところがある点です。まあ何をやるかわからない。まして有泉専務の腹心ともなれば、やるときはきっと、トコトンまでやるでしょう。案外、この男は手強いですよ。こっちも腹をきめてかからないと……」
「ご参考までに、大和鋼業の場合を申しあげましょう」
青空同盟の代表が、村岡教授に発言を求めた。
「どうぞ」
「これまでのところでは、大和鋼業は、硫黄酸化物の一時間当たり総排出量を、八百立方メートルにさげております。ですから、このガスを逆に地下に圧入して、天然ガス採取後の地盤沈下を防ぐというのは、企業的に採算がとれるかどうか……つまりこの面から言えば、現在、公害防止で交渉中の私どもも、会社にだまされているのかもしれないし、みなさんにも、その危険があるわけです。ただいま人の問題が出ておるようですが、大和鋼業の増山という課長は、なかなか頭のいい男でして、一対一ではとてもかないません。こうした会社のエリートが公害の窓口に出ているのは、つまり会社も公害を生命線だと考えるからでしょう」
「青空同盟のかたにうかがいますが、大和鋼業の排出ガスは、改善策がかたまっても、まだ人体に悪影響のあるものでしょうね？」
村岡教授が尋ねた。
「ええ。ありますよ、それは。亜硫酸ガスの着地濃度は〇・〇一八PPMまで改善されることになりそうですが、LNG（液化天然ガス）でも使わないことには、完全な解決はありませんから……もっとも、私たち住民が激しく抵抗するんで、苦しまぎれに、大和鋼業では、東光石油の話にとびついたんでしょうな。これだと、排煙処理はできそうだし、LNGも安く手にはいる……」

ふたたび会場を笑いが渦巻いた。
「わかりました。どうもありがとうございます。それを裏がえせば、どちらの会社も、住民運動の力をおそれていることになりますね。七〇年代は住民自身の力で、身近な問題を解決してゆくような気がします。さて……と、いろいろ話が出ましたけれど、この辺で、今後の対策をとりまとめたいと思います。先程、申しましたとおり、東光石油の、いわゆる公害防止策としての新技術は、私が責任をもって調査します。ところで、本日はこの後、東光石油の岩井課長と懇談する予定になっておりますので、私のほかに、先日選出された代表者として、中村力三さんと小谷野茂吉さんが出席いたします……」
村岡教授は巧みにしめくくると、この後、予定どおり天然ガス開発絶対反対のアピールを採択して、住民大会は活気にあふれた会議を閉じたのである。

3

懇談会場にきめられた関内の料亭「柴」に行くと、すでに東光石油公害防止事業部業務課長の岩井が、二人の課員とともに、三人を待っていた。
「お待ちしておりました。どうぞこちらへ……」
式台まで出迎えた岩井は、深々と頭をさげた。料亭の柔らかな照明に、年輩課長の細く光る白髪が浮いて見えた。
〈ほう。だいぶ窶れたな……〉
村岡教授はすぐに感じた。むろん、東光石油に関係していた教授は、これまで幾度も岩井に会っている。が、そのときより、ひどく憔悴しているのだ。
〈あの専務は人使いが荒いからな……〉
教授は有泉の爬虫類のような表情を、ちらっと思い浮かべた。
岩井は、まず村岡教授を上座に据え、中村、小谷野の順に席を勧めた。村岡要太郎としては、実に奇妙な席である。数年まえならば、向かい側の、岩井たちと同じ場所で、会社のために一肌ぬいでいたはずだ。それがまったく逆の立場になっている。
住民サイドから、東光石油を公害会社として、告発しているわけなので、いくら時勢とはいえ、皮肉なめぐり合わせと言わねばならない。
「ま、とにかく、どうぞ、おひとつ……」
合図とともに、六人の芸者と四人の女中が、いっせい

に白い手をのべ、お銚子を持った。
「本日は、お集まりがあったそうで……いかがでしたか？」
岩井は低姿勢で訊いた。
「ひとつお断わりしておきますが、私たちはこんなサービスを受けに来たのじゃありませんよ」
村岡教授は杯こそ手に持ったが、厳しい表情で言った。
「いや、それはもう……よくわかっております。これはホンのおしるしで……」
岩井課長は慌てて答えた。
「何か特別なお話があるというので来たわけですから、まずそれを伺ってからにしましょうかね……」
教授は揺るがぬ調子で続けた。
「そうですか、それでは申しあげましょう。先生にお世話願って、うちの会社の千葉と静岡の工場を、みなさんに見ていただきたいのです。先生はご承知だと思いますが、千葉では、天然ガスを採取した後の地盤沈下防止設備を見ていただきたいし、静岡の実験装置のほうは、公害防止事業の先端をゆくものがございます。ただ、方向がまるで逆の、千葉と静岡なので、最初に千葉をごらんいただきたいのです。これは専務の有泉が、特に先生にお話ししてくれと申しておることで……」
「そのこと？……」
教授は軽蔑の色を浮かべ、頬の筋肉をピクッとふるわせた。
「千葉工場のやり方は、私も相談を受けたからよく知っているが、岩井さん、あれは不完全だ。天然ガスを採った後へ、排煙ガスを圧入するときに、四〇パーセント以上が逆流してくる。あそこは千葉の山の中だからいいとしても、横浜のような大都市では不可能……こんなことは有泉君に、何度も言ってある。いまさら、そんな効果の薄い工場を見学してもはじまらないな」
「いえ。それが先月末までに、本社の技術陣を総動員して、すっかり改善いたしました。ロス率四〇パーセントも大幅にダウンして、現在は一〇パーセント以下になっております」
「完全にゼロにならなければだめですよ」
村岡教授は冷ややかだった。
「いいかげんなものを見せても、その手にはのらないぞ」
小谷野が細面を紅くして、岩井課長に言った。漁民あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong